



高精度前立腺ターゲット生検装置を使ってがんの疑いがある場所をピンポイントで針生検をする医師=別府市の別府湾腎泌尿器病院

別府市の別府湾腎泌尿器病院は、最新鋭の前立腺がんの検査機器や、県内で2台目となる手術支援ロボットを導入した。同病院は上人病院の機能を引き継ぎ、2月に開院した。

針で前立腺の組織の一部を抜き取る「針生検」の最新鋭装置「トリニティ」を九州初導入。事前に撮影したMRI（磁気共鳴画像装置）画像とリアルタイムの超音波画像を重ね合わせた

最新鋭の前立腺がん検査機器 県内2台目 手術支援ロボット

「世界標準の治療へ貢献」

内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ」は大分大病院に次いで県内では2台目。人口30万～50万人に1台が必要とされ、大分大病院は手術まで2、3カ月待ちの状況。1台増えることでより適切なタイミングでの手術が可能になるといふ。

佐藤文憲院長は「従来の針生検ではがん細胞が見つからず、経過観察になつている早期の前立腺がんの患者がいるとみられる。待ち時間が長かつたダヴィンチも迅速に対応できるようになる。これからも大分で世界標準の治療ができるよう貢献したい」と話した。

前立腺がんは早期の場合、自覚症状がない。進行すると①尿が出にくい②排尿時に痛みを伴う③尿や精液に血が混じるなどの症状がある。検査は血液検査による診断や直腸からの触診、MRIや超音波を使った画像診断がある。

前立腺の融合画像を3D表示しながら、がんの疑いがある場所からピンポイントで組織を微調整するガイド機能もあり、がんが発生しやすい周辺部をランダムに抜き取る従来の方法より格段に精度が高い。

検査結果でがんの可能性が疑われる場合は、針生検によりがん細胞の有無や悪性度を調べる病理検査をする。一般的な針生検は、がんができるやすい前立腺の外側の部分（辺縁域）をランダムに抜き取るため、それ以外の部位に発生したがんの診断率が低いことが問題とされる。

ダヴィンチ

ロボット部と医師が座る操作台などで構成。ロボット部には4本の腕があり、先端部に鉗子や3D内視鏡カメラを搭載している。患者の腹部に開けた小さな穴から先端部を挿入し、直 径約1ミリの小さな鉗子で細かい作業ができるのが特長。全国に約300台あり、大分県では2012年に大分大病院が導入した。